

# 第3学年総合的な学習の時間 学習指導案

北谷町立北谷中学校 教諭 石井 貴徳

## 1. 単元名「沖縄の宝（うちなーぬたからむん）」「うちなーぐち」

### 2. 単元の目標

- ・世界に存在する言語の種類と今の言語の現状を知り、沖縄にあるうちなーぐちについて調べ、発表することができる（知識・技能）
- ・討論において失われつつある言語の現状から守るべきかどうかを客観的に考えて自分の意見を述べることができる。また、言葉をお話さずに自分の意思を相手に伝える方法を考え、表現することができる。（思考・判断・表現）
- ・沖縄のうちなーぐちについての歴史や地域による違いを意欲的に調べたり、うちなーぐちを使って意欲的に話すことができる（主体的に学習に取り組む態度）

### 3. 単元について

#### （1）教材観

現在、世界では 7000 の言語が使用されているが、そのうち半数は今世紀中に消滅するといわれている。もっと言うと「2週間に1つの割合で言葉が消滅している」のである。このような事態になった原因としてよく指摘されるのは、植民地化やグローバリゼーション、都市部への人の移動などや、地震などの天災で言葉の使い手が亡くなってしまうことなどが挙げられる。しかし、そのような原因よりもっと重要なことはそれによっておこる結果つまり、「言語が失われることは文化が消滅することを意味する。」ことである。現在、うちなーぐちとよばれる沖縄方言を含む琉球方言は 2009 年のユネスコによる言語の消滅危険度評価で危険評価、つまり消滅する恐れのある言語として挙げられている。我々のまわりでもうちなーぐちを話す者が高齢化により、どんどん少なくなっていく中で、かたや若い世代はうちなーぐちと共通語である日本語をかけ合わせた、「うちなーやまとぐち」とよばれる言葉をお話している。つまり文化の継承が少し違った形で起こっているのである。現在、沖縄本島では純粋なうちなーぐちを話す者は少ない。しかし、そのような貴重な方言が多少表現が違ったとしても若い世代から高齢者などのすべての世代において日々の生活の中に浸透し、当たり前のように使われていることから、守るべき沖縄の宝としてうちなーぐちを取り上げて扱うのにふさわしい教材と考える。また、うちなーぐちは他の方言と比べると理解が難しい方言の部類に入ると思われ、地域や世代などでも違いが見られるため、非常に興味深い教材であると思われる。

#### （2）生徒観

教材観でも述べたが現在の中学生在が使っている言葉のほとんどがうちなーやまとぐちであり、本当のうちなーぐちとはいいがたいところもある。さらにこのうちなーやまとぐちは若い世代の流行りを受けて日々変化しており、新しく生まれた言葉も多い。地域による変化もある。そのような新しい言葉の意味も曖昧な状態で使う生徒が多いため、誤解が生まれることも多い。また、現在の親の世代と比べても本土からの共通語が浸透してきており、うちなーぐちの活用頻度はどんどん少なくなっている。親の世代であっても以前は祖父母のうちなーぐちをお話せなくても聞くことができた人数も今では本当に少なくなっている。さらにその子供たちの世代では全く理解できない者がほとんどであることは想像に難くないだろう。そんな状況にある生徒たちにとって、うちなーぐちについて考えることは普段使っている言葉の源を辿る学習として意欲的に取り組みやすいと思われる。

### (3) 指導観

沖縄の宝は数えきれない。しかし、人々の生活・文化に一番根付いている言葉や方言に対する意識が低いと感じることがある。「言語が失われることは文化が消滅することを意味する。」という言葉は誇大表現ではない。言葉があるだけで、ない場合と比べ人は何百倍ものコミュニケーションをとることができる。そこから表れる感情や雰囲気人が動かすこともあるだろう。このうちなーぐちの学習を通して言葉の大切さやその言語が生まれた歴史、うちなーぐちが伝播し、伝わっていった流れや現在のうちなーやまとぐちとの違いなど、分かっているようで分からなかったことを学習できる機会としたい。

### (4) ESDとの関連

・学習を通して主に養いたいESDの価値観

【多様性】：うちなーぐちを含めた世界の言語の種類やその実態を知ることを通して文化の多様性に気づくことができる。

【有限性・責任性】：地域で話されているうちなーぐちを調べることによって昔から話されてきた言葉が衰退し、消えてしまうかもしれない状況を考え、後世に残そうとする態度を養う

【相互性・連携性】：祖父母の代から話されてきたうちなーぐちを話す取り組みを行うことでうちなーぐちを世代間のつながりをつくり、みんなで守り、周りに広げていく心を養う

・主に関連するSDGs

目標 4 すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会をを促進する

4.7 2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、すべての学習者が持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

目標 10 各国内および各国間の不平等を是正する

10.2 2030年までに年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、あるいは経済的地位その他の状況に関わりなく、すべての人々の能力強化及び社会的、経済的及び政治的な包含を促進する。

## 4. 評価規準

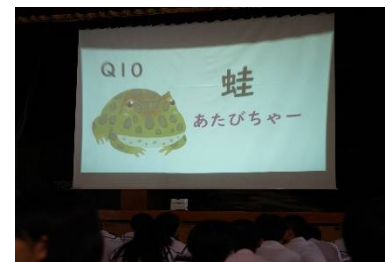
知識及び技能	思考・判断・表現	主体的に学びに向かう力
①世界に存在する言語の種類と今の言語の現状を知る ②沖縄にあるうちなーぐちについて調べ、発表することができる	①討論において失われつつある言語の現状から守るべきかどうかを客観的に考えて自分の意見を述べてることができる ②言葉を話さずに自分の意思を相手に伝える方法を考え、表現することができる	①沖縄のうちなーぐちについての歴史や地域による違いを意欲的に調べることができる ②うちなーぐちを使って意欲的に話すことができる



<沖縄の宝のウェビング>



<うちなーぐちを残すべきかの討論の場>



<沖縄ハンズオンによるうちなーぐち講話>

5. 学習活動の概要

全6時間

	主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
見 つ め る	<ul style="list-style-type: none"> <li>●最近のニュースについて考える 「どんなニュースが記憶に残っているかな？」</li> <li>Q【問】あなたの考える沖縄の宝はなんですか？</li> <li>●出てきたものをグループ分けをする</li> <li>●模造紙に書いて発表する</li> <li>●出てきたものを黒板に貼って比較</li> <li>●出てきたものの中から「うちなーぐち」について考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最近のニュース PP 使用 (近所の火事、バイク事故、首里城) ↑できるだけ身近なものから県内まで</li> <li>・個人でのウェビング→6人グループでの話し合い</li> <li>・グループ分けが難しいところは「海・陸」などの大きなカテゴリーから考えさせる</li> <li>・発表の役割分担をする</li> <li>・共通しているものを把握する</li> <li>・おじい、おばあが使っているうちなーぐちってわかる？</li> </ul>	<p>ワークシート</p> <p>コミュニケーション力</p> <p>発表・模造紙</p>
深 め る	<ul style="list-style-type: none"> <li>●世界で話されている言葉の種類と現状について（滅亡する言語、滅亡した言語）</li> <li>Q【問】うちなーぐちは守るべきか？ (討論活動)</li> <li>●言葉のない世界を体験する</li> <li>●言語＝文化であることの紹介と2009年のユネスコの提案を知る</li> <li>●もう一度うちなーぐちは守るべきか考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PPを使って視覚的に言語の現状を伝える</li> <li>・討論：自分の考えをワークシートに書き、賛成・反対のゾーンの席に移動する。それぞれから議長を1人ずつ選出し、討論をスタートする。途中と最後にゾーンの移動を許可する。(みんなの意見を聞き、考えが変わった人の為)</li> <li>・ロールプレイ(2人セット：片方がもう一人に対して紙に書かれたお願いを言葉を使わずに(ジェスチャーなどを使って)相手に伝え、理解できるかどうか)</li> <li>・PPを使って説明する</li> <li>・グループで話し合い活動を行い、グループごとの意見を発表する</li> </ul>	<p>※知識及び技能①</p> <p>※思考・判断・表現①</p> <p>ワークシート</p> <p>クリティカルシンキング</p> <p>コミュニケーション力</p> <p>※思考・判断・表現②</p> <p>行動観察</p> <p>ワークシート</p>
調 べ る	<p>【PC室&amp;図書室】</p> <p>Q【問】みんなの知らないうちなーぐちの秘密を見つけよう</p> <p>●グループで調べる(4人グループでPC室と図書室で半々にする)</p> <p>●次時までPC&amp;図書室で分からなかったことについて親、祖父母、地域の人からインタビューしてくる(宿題)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PCや図書室の本を利用してうちなーぐちについて調べる (各教室にあるしまくとぅば読本も利用してよい)</li> <li>・調べる内容について悩んでいるグループには「歴史・地域・今と昔」などのテーマを与えて促す</li> <li>・地域の公民館や老人クラブ、文化センターや町立図書館などを利用して促す(写真などを撮影して資料もOK)</li> </ul>	<p>ワークシート</p> <p>宿題のワークシート</p>

まとめる	<p>【PC室&amp;図書室】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●前時&amp;宿題で調べたことを新聞形式にまとめる (もし、できなかった場合は宿題)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・壁新聞のひな型配布 (A0 サイズ)</li> <li>・グループで役割分担を行い、書く場所やレイアウトを決めておくに進めやすい</li> <li>・色鉛筆、マーカー、色紙、ハサミ、のりなども準備</li> </ul>	<p>行動観察</p> <p>※主体的に学びに向かう力①</p> <p>※知識及び技能②</p> <p>コミュニケーション力</p> <p>システムズシンキング</p>
伝える	<ul style="list-style-type: none"> <li>●前時に作った新聞を発表する</li> <li>●発表した新聞を張って展示し、お互いに読み合う</li> <li>●うちなーぐちを使っている海外の国を紹介する</li> <li>●海外の国の言葉の中にうちなーぐちと同じ表現があるのはなぜかグループで話し合う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表の役割分担をする</li> <li>・壁新聞の展示だけでなく、集会時のすき間時間でのうちなーぐちクイズや給食時の放送による啓発も行う。</li> <li>・中国語、タガログ語、インドネシア語の中でうちなーぐちと同じものをピックアップする</li> <li>・話し合いが進まないようであれば、伝わった時期などヒントを与え、促す</li> </ul>	<p>※知識及び技能②</p> <p>発表</p> <p>システムズシンキング</p> <p>コミュニケーション力</p>
深める	<p>【体育館 or 多目的室】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●町内 NPO (沖縄ハンズオン) に講演を依頼し、全学級を対象に講話を行ってもらう。</li> <li>●その後、各学級に分かれて実際にコミュニケーションアクティビティを行う</li> <li>●3 年生で踊るエイサーの地謡の歌詞の意味を考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に生徒が使っているうちなーやまどぐちとうちなーぐちのちがいを教えてもらう</li> <li>・各教室に講師を配置し、実際にうちなーぐちで話してもらうことによって単に言葉の羅列ではなく、表現の仕方やコミュニケーションの取り方を学ぶ。</li> <li>・エイサーで歌われている唄の意味を単語の流れから考えてみる</li> </ul>	<p>コミュニケーション力</p> <p>※主体的に学びに向かう力②</p> <p>長期的思考力</p>

## 6. 成果と課題

はじめ、沖縄の宝として挙げられたものはやはり首里城 (70%) でうちなーぐちは7%のグループしか挙げなかった。その理由として「当たり前に使っているから」が多く、次いで「言葉と宝が結び付かない」が多かった。しかし、この活動を行っていく中で「うちなーぐちって知っているようであり知らない」や「言語が2週間に1つ消えているのに危機感を感じた」など感想が増え、終盤では「自分が使っている言葉がどうやってできたのかが分かった」、「おじやおばあの話をもっと聞いてみたい」、「自分たちの地元の方言を探したい」などの意見が出てきて、今まで身近にありすぎて気に留めなかったものの大切さを改めて実感したという意見が多数を占めた。また、言葉を使わないロールプレリアクティビティではほぼ100%の生徒が「楽しい」と答え、さらに「言葉を使わないで伝えることって難しい」や「言葉って何気なく使っているけど実は結構重要ということが分かった」などの意見が挙がった。課題としてはやはり生のうちなーぐちに触れる活動の選択肢があまりなく、その分野を開拓することが重要である。ここからの発展として地域でのうちなーぐちの違いなどを学校間交流などで行うことも自分たちが使っている言葉を認識するうえで大切であると感じる。